

## 特別講演 I

座長：小川 良雄（昭和大学）

### 痛みを伴う下部尿路症状の漢方治療 ～慢性骨盤痛症候群を例に～

山口総合健診センター  
飯塚 徳男

私事で恐縮であるが、外科医から漢方診療科への転任を突然言い渡され、気づけば二十余年が過ぎた。最近では、混沌とする社会を反映してか、患者の訴えの多さに驚くとともに、文明の進歩により交絡因子が複雑に絡む病態が増えているのを実感する。結果として、純系な薬というより、漢方薬のような作用が弱くともファジーな多成分系の薬が活躍できる場面が増えていることも実感する。

さて、皆様ご存知の慢性骨盤痛症候群(Chronic Pelvic Pain Syndrome: CPPS)は、前立腺炎のみならず膀胱痛症候群、間質性膀胱炎や外陰痛症(外陰前庭痛症)、さらには、重症の月経時痛、子宮内膜症関連痛、過敏性腸症候群等も包摂する概念として、決定的な要因のない骨盤や下腹部の痛みを総称して一括りにして今日に至っている。

CPPSは漢方的には膀胱の熱症(炎症)あるいは加齢に伴う腎虚(下半身の脆弱化・フレイル化)に、気・血・水の停滞に起因する疼痛(漢方では痺症と呼ぶ)や精神異常が加わった病態と考える。CPPSの大半が尿路症状のみならず、便通異常を伴っていることから、下部尿路症状を改善する方剤と芍薬を含む建中湯類の二剤を併用して二便(大・小便)を整える治療パターンが多くなる。これに近い理論は「二便は早く通じて去べし」と貝原益軒の養生訓に掲載されている(西暦1712年)。これをCPPSに応用したに過ぎない。本講演では、2017年3月からの1年間で疑い例を含むCPPS9例(34歳～74歳、平均58歳。男性1、女性8)の治療パターンを中心にCPPSの漢方治療を解説したい。